明治十九年七月三十日内務省聯付

東京帝國大學圖書館藏

南島紀事中卷

周防　後藤敬臣編

前紀上

尚圓王　宣威王　真王　清王　元王　永王

明成化六年　鎖之側金丸を立て國統を繼かしむ是を尚圓王とし尚圓名を思德金と曰ふ金丸を其別稱あり伊平屋島伊是名首見村の人里主尚稷本名不傳追稱ヲ以書ス の子にして為朝の子尊敦の孫義本の亂あり或ハ傳フ伊平屋ニ一嶽アリ天孫嶽ト稱ス因テ天孫氏ノ裔ト金丸生まれて足底に痣あり其色金の如し泊村

の人大安里と云ものの一見して曰此人後必に億兆の上に立んと後故あり國頭に來り越來王子泰久に依る泰久信して思達王に薦む思達用て筑登之とに尋て筑登之親雲上に進む泰久王位に即くに及ひ内間の地頭とに長祿三年鎖之側官に任に初め尚徳の薨にるに當り法司等世子を奉せんとに仍て例に遵ひ群臣を集め牛耳を切り此事を告く群臣皆法司の權勢を畏れ相顧みて言ものなし一か忽一人の老臣鶴髪を揮ひ身を挺て出て高聲に言て曰國家ハ萬姓の國

家なり一人の國家に非に吾先王の所為を觀るに暴虐無道なるとハ商紂に勝り酒池肉林の驕奢ハ夏桀も及ハに祖宗の功徳を念ハに臣民の艱苦を顧ミ玉ハさりき今又世子の幼冲を以て之に繼うも恐らくハ生民塗炭の苦を救ふと能ハさらん幸に内間の地頭御鎖之側金九寛仁大度四境其徳を稱揚きるとなし民の父母と為に此人を除き復さ誰とうする是も天我君を生にる也と言未た畢らさるに滿廷の臣民異口同音に其言の允とふ當まるを言ふ貴族近臣ハ

早くも其變あるを察し先を爭ふて逃走に夫人乳母を世子を懐きて真玉城に匿れ居きを城兵之を追ひ遂に世子をも殺しける是に於て群臣鳳輿龍服を整へ内間（内間ハ西原間切嘉手苅村ニ在リ村ニ一殿アリ内間御殿ト曰フ即金丸ノ故宅也今存スルモノハ蓋故堀ニ就テ再建スルノミ別ニ一殿アリ一大石碑ヲ置ク其文尚敬王自撰并書ニ係ル）に至り金丸を迎ふ金丸大に驚きて曰我聞く伯夷叔齊ハ武王を諫めて首陽に餓へ死と我將に故山に隱まんのみ卿等急き首里に還り宜しく賢德の人を薦めて君とおしへしと固く辭して就うに去りて海岸に遁る

群臣追隨極言して請て曰君若し出てまんハ天下の蒼生を奈うんせんやと金丸天を仰き流涙雨の如し竟に野服を脱し龍衣を着け首里に至り大位を踐む後其岸を呼て脱衣岩と曰ふ（岩ハ今海中ニアリ）三年長史蔡璟使者吳司馬、益周間、宋壁、（三員）を明に遣し方物を貢し尚德王の訃を告く尚圓武實を以て法司と（是歳島津忠國卒ス忠國老境常ニ琉球ニ航スルノ志アリ遂ニ果サスシテ没スト云）四年正月島津立久使者を琉球に遣し太刀を贈り來朝を勸め且符を尚圓に授け我が諸船の符を持せさる者ハ琉球に入ることを

許さゝらしむ是より先き立久其臣五代友平を京師ゝ遣し足利義政ゝ請ふ所あり因て此ゝ至るとゝ云ふ二月尚圓金剛寺報恩寺の住持僧及里主等をして薩摩ゝ聘問せしむ立久待遇殊ゝ渥し是歳明主正副冊使を遣し尚圓を封して中山王と爲に尚圓即ち謝恩使を發し使臣武實等歸途福建ゝ次とる時ゝ從者土人を殺し財を奪ふ明の礼部奏して曰琉球毎年入貢に故ゝ動きハ奸弊を生し請ふ二年毎ゝ一貢せしめんと明主之ゝ從ふ(是より清代ゝ至り恒例と爲る)五年六月尚圓長慶院の住持僧を薩摩ゝ遣し書を其國老ゝ致し太刀を贈りて恩を謝し且船符及聘使の二事謹て命ゝ遵ふへしと報に又使を發し足利義尚の繼統を賀せんと欲し遂ゝ果にしと能ハにと云ふ八年明成化二年七月尚圓薨し歳六十二臣民哀號悲泣もゝ父母を喪ひたるゝ如しらそ尚圓の大位ゝ登るや苛政を除き寛法を設け仁を以て民を育し禮を以て人を待つ先世遁隱の士爭ふて仕を願ふ君子進み小人退き風俗雍變し百姓業を樂ミ復と怨嗟の聲ゝし且巴

志王の制は倣ひ大臣を遣して北山を監守せ
め大は舜平の治を致せり金丸年二十にして父
母共に喪ふ時に弟宣威年甫めて五歳家貧し
て養育甚だ困しめり金丸益〻農事を務む會ま
大旱して田水皆涸る但金丸の田水滿て漫〻たり
村人皆疑ふて水を盗むものとして將ふ害を加へ
んとす金丸辯もること能はに竟に田園を棄て
妻及弟を携へ海を渡り國頭に來り居ること數年
畢に王叔泰久の信にる所と為る應仁文明の頃
明成化年寺を首里城外に建て天王と號け家廟の所

と為す明應三年圓覺寺を以て宗廟と為す天王寺を以て王妃の廟と為す尚稜王妃以下諸妃の神位を泊村の東南に奉安すと云又地を泊村の東南にとして中山
の國王廟を建て舜天以下世〻國王の神位を置
き寺を建て崇元と曰ふ冊封の時諭祭の礼此に行ふ又春秋二仲祭ルニ西土の礼を以てす沖縄志は尚真の時明應三年の創建と為す今世譜に從て此に紀す又一寺を浦添村に創め龍福と號に旧と極樂寺と曰ふ廟なり後祝融の災に罹ル尚圓因て改建今の號に更め歴代の王廟と為すと云
文明九年春尚圓の弟西之世主立つ之を尚宣威
王と為に蓋世子幼冲法司相議して之を立つ
宣威恭謙にして篤行あり祚を踐みしより僅に

は六月にして位を尚真に禪り身を越來に遜れり

文明九年七月尚圓の世子於義也嘉茂慧位に即く是を尚真王と為に十二年二月幕府布施下野守に命じ其臣安田某を薩摩に遣し中山王の朝貢を促さしむ其撥文略曰宜しく王に諭し先例を照して速に貢船を發せしめよ使の回るに後ること勿れと島津忠昌人を安田某に副へ琉球に遣に十三年天王寺住持僧及謝名大屋子をして薩摩に來聘せしめ藩主忠隆の襲封を賀に明應

元年尚真寺を首里の當藏村に創建し圓覺寺と稱し其祖先の靈牌を安置に九年八重山島酋長大濱叛を尚真宮古島の忠臣仲宗根玄雅に令し兵を發し伐て之を平く始めて宮古八重山兩島の頭職を置き首里より交番在勤せしむ文龜二年城門外の地を鑿ち沼を作り堂を其中心に建て朝鮮國王進むる所の方冊藏經を藏に沖縄志ヲ按スルニ是年尚真薩摩ニ聘礼ヲ修メ朝鮮版ノ大藏經ヲ贈ル藩主僧ヲシテ讀マシムトアリ朝鮮王贈フル所蓋シ數部アリテ然ルヤ否ラサレハ年ヲ同シフシテ藏散ヲ異ニスルノ理ナシ然レ𪜈世譜註シ曰尚徳王亡後其經尚存ス故ニ尚真王堂ヲ建テ之ヲ藏ス歷年稍久シ堂壞レ經朽チテ空地ト

為ル天啓元年尚豐王改テ辨財天女堂ヲ建ツト而シテ沖縄志ハ創建ノ堂ヲ以テ辨財天ヲ安ストルモノトシ藏經ノ事ニ及ハス知ラス孰レカ是ナルヿヲ

永正六年金銀銅簪を製し臣民上下の等級を班つ十三年尚真使を薩摩に遣し島津忠治の襲封を賀す是歳三月備中連島の人三宅國秀琉球を襲はんと欲し兵船十二艘を以て薩摩の坊の津に來る島津忠治之を聞き琉球は古より我に附庸の國なり宜しく斥くへしと乃ち幕府に報し國秀を討んことを請ふ將軍義植之を許す六月忠治兵船を發し坊の津に至り我各船に柴を積み風に順ひ火を縱ち勢に乘じて攻擊す國秀大に敗し其黨類と皆死す後尚元の時當時國秀カ功ヲ竣ヘサルヲ憾ミ同郷ノ人今岡民部大輔道詮亦之ヲ襲ハントス島津貴久其臣伊地知周防村田某ヲシテ琉球ニ報知ス大永二年明主朱厚熜位に即くや當り尚真王舅魯加尼等を遣し之を賀す五年大内義興細川高國等明國と互市せんと欲し僧宋設宋素卿等を遣して其事を謀る宋設等福州を騷擾す明主尚真を价して書を足利義晴に贈り賊を捕へんことを請ふ六年明嘉靖五年十二月尚真薨す歳六十二尚真天質明敏又能く己を謙し益を受く先王の典型を活用し能

く父業を紹き精を勵まして治を圖り曾て百僚
に職を授け臣民に簪冠を班つ是を以て百姓命
に安し今を守る尚真諸按司の采地に住せること
とを止め皆聚めて首里に居らしめ遥に其地を
領し毎歳督官を遣して之を治むるの制を定む嘗
て謂へらく舊制に地を畫して按司を封に按司
各〻城地に據り互に爭鬪し兵亂息む時なし若し力
を聚め兵柄を收むるの全きに如かと乃ち按司を
聚め遂に刀劒弓矢の屬悉く之を府庫に藏め以
て讓國の具と爲に及へり但王子を今歸仁に

東京帝國大學圖書館藏

遣し北門を監守せしむるの制は猶旧に依る又
三府三十六島に令し重て經界を正し納税の法
を定む又旧制國君の薨るや侍臣寵を受るも
の皆殉死に尚真曰彼も亦人の子なり豈に忍ふ
へけんやと遂に之を禁に治道大に明に政刑咸
く備り國内始めて晏如たり尚真の生るゝや父
尚圓卜部に命して之を筮せしむ卜部曰く某の
日城を出て南行し始めて逢ふ者を以假父とす
さら福壽疆りなからんと尚圓其言に從ひ左右
に命して世子を抱き南行せしむ途に阿擢莘と

東京帝國大學圖書館藏

以ふものは逢ふ携へて城に歸り假父と為に尚真の位は即くやと士籍は列し宅を賜ふ永正六年阿擢莘紫金官を以て没に尚真厚く之を葬る大永七年第五子天續之按司添明立つ是を尚清王と為を蓋し世子尚維衡父王の意は愜はざるを以立つことを得に享祿三年足利義晴尚清は托し書を明國は致して使臣の暴行を謝し勘合金印を更めて再ひ交通せんことを請ふ明主左給事中陳侃等を使ふ書を齎して琉球は來り尚清を价して旨を義晴は傳へ福建を騷擾せ

首罪者を求む天文六年尚清兵を發して大島を討し與灣大親を殺に與灣は大島酋長の一人なり與灣純正職務を守る佗の酋長之を妬み事は托して異志ありと讒言に尚清大島の遠く海を隔て虚實辨し難きの故を以遂は其讒を信して事此は及へり尚清の兵至るや與灣は敢て抗せに天を仰き嘆して曰吾何の罪あるて歟此は至る吾を知るものは唯天乎と自ら縊れて死に此役其子糠中城を擄へて還る（其裔孫馬氏今猶存ス蓋シ與那原良傑小禄某等ノ始祖ナリ）十一年長史蔡延美明國漳州

の人陳貴等を招引し舩を駕して國を還る適ま潮陽の舩と利を爭ひ互に相殺傷に延美ハ貴等を旧王城に置き盡く其貨貲を没入し貴等夜奔り逃きんとせしか守者に捕へられ遂に殺さるるもの多し是に於て貴等を誣むて賊となし械繫して福建に送る延美表を賫らし明國に赴き陳せんとす時に明國巡按御史徐宗魯等會同して譯審し別に狀し以て明主に聞し延美等を留めて命を待たしむ後ち旨を得てより其處分に曰貴等法に違ひて番に通ず宜しく國典に遵ひ重

治ちへし琉球既に屢〻與に交通し今敢て貨利を攘奪し擅に我の民を殺し且誣ふるに賊を以てに詭逆不恭此より甚しきものなし蔡延美本宜しく拘留して重く處まへしとなし素朝貢の國に係ることを念ひ姑く放ち回まへし後若し悛めさるものは即ち其朝貢を絶んと福建の守臣をして備へて國に至り之を知らしめたり十三年首里城の東南壁を築く其高き五丈長さ百五十丈十六年大美殿を造る二十三年二砲臺を那覇港口に築く蓋し我の邊民明の江浙を侵にこ

こを聞き此備へあり弘治元年尚清薨に歳五十九尚清為人英邁政を為して倦まに弊事を釐革する所多し尚清疾篤きに臨み法司毛龍吟和為美葛可昌を召して謂て曰吾も將さに逝んとす汝等能く世子を扶持し國家を保安せよと日ふらにして瞑に為美可昌二人群臣に謂て曰世子柔弱人君の任に勝へに四子尚鑑頴敏なり宜し く立て王と為にへしと群臣敢て可否すること なし龍吟曰世子は正妃の生む所長を立つるは古今の常典況んや遺命をや諸君若し遺命に背

かは吾れ自殺して先王に地下に訴んのみと聲色特とふ厲しかれは二人畏縮して復た誣ゆる能はに議遂に定まる是より先き伊江島毎夜奇光を放つ人を遣して視せしむるに一古鏡を獲さり老僧を召して之を問ふ對へて曰是天照太神の垂跡なりと即ち祠を島中に建て鏡を奉安し老僧をして看護せしめ其寺を照大山と號く と云ふ

弘治二年世子日始按司添立つ是を尚元王と為に是歳我邊民の明の江浙を侵に者敗れて琉球

に入る尚元兵を出して之を擊つ永祿二年法司和為美を久米島に葛可昌を伊平屋島に流に是より先き薩日隅三國大に亂き島津貴久父忠良と謀り國難を掃蕩し人民を綏撫に尚元之を聞き天界寺僧登叔及與那城良仲を薩摩に遣し黄金五十兩真南蠻香五十斤紅糸白糸各五十斤線織物白布各五十端砂糖綠醑の類五十種を貢に貴久使者を召して之を饗し多く物を與へ且尚元に答書を贈る十二年尚元天龍寺僧を薩摩に遣し方物を貢に元亀元年正月島津義久廣濟寺の僧雪岑を琉球に遣し答書を贈り併せて其父貴久の翰を付に二年大島を討に與灣大親讒死の後佗の酋長叛を謀り貢船を絶つ是に於て尚元親ら兵船五十艘を率ゐ伐て之を平く是より毎歳那覇人を差し更番在勤せしむ尚元大島の役疾を得て還り三年四月遂に薨に歳四十五尚元性質仁愛臣民心服を政を為に皆旧章に遵依に尚元好んで本邦の風俗を慕ひ模倣をすること甚多し當時久米村林某の如き村中に天満宮を建つるに至る

天正元年第二子日豐操王立つ是を尚永王と為
に三年三月尚永天界寺僧及金乃大屋子を薩摩
に遣し方物を貢し義久の襲封を賀に是より先
き薩摩の使僧雪岑を待つの薄きを以て別使を
差して三司官等を責む是に於て併せて其謝辞
を陳に因て許して藩主に謁見せしむ待遇甚渥
し六年六月尚永天界寺の僧修翁及ひ妙嚴寺の
住持僧等を薩摩に遣し方物を貢に七年明主朱
翊鈞其臣崇業等を琉球に遣し尚永を冊封せ崇
業等還るに及んで奏して曰日本新に館を琉球

に建て兵卒百餘人利刀を帯ひて往来し國人甚
た畏懾に堪へ是歳首里の門榜を改造し守禮之邦
の四字を掲く八年尚永普門寺の住持僧等を薩
摩に遣し方物を貢に十三年四月尚永薩摩の封
境日くに擴まり既に六國を併にと聞き天王寺
の僧祖庭等を使とし賀書を呈し方物を貢に十
六年明萬曆十六年豐臣秀吉島津義弘に命し琉球を招
諭せしむ義弘大慈寺の僧龍雲を遣し手書を尚
永に致し速に京師に来聘せしむ尚永之を諾せ
是より先き秀吉關白に任せらき海内を統一し

群雄皆服従に義弘も亦往て京師ゟ謁に因て此命を受く十一月尚永薨を歳三十

尚圓前紀中

寧王

天正十七年（明萬暦十七年）浦添王子立つ是を尚寧王と為に尚寧ハ尚真王の玄孫ゟり初尚真の世子尚維衡父の意ゟ愜ハさるを以て廢せられ後郊野ゟ棲遲し尚弘業を生む弘業尚懿を生む懿尚寧を生む尚永薨して子ゟし群臣相議して尚寧を迎ふ是ゟ於て尚宏を國相とし法司馬世榮金國鼎毛龍文等在職故の如し七月尚寧使者を發し豐臣關白ゟ京師ゟ謁に八月正使天龍寺の僧桃

庵副使安谷屋親雲上を遣し書翰及方物を齎し薩摩に來る廿四日義弘正副使者を率ゐ薩摩を發し九月京師に至り琉使を伴ひ聚落第に詣る關白召見し人をして其表文を讀ましむ其文略曰聞日本六十餘州下塵を拜望し幕下に服し加ふるに高麗南蠻も亦威風に偃ぬと我遠洋の小國一禮に及ひ難しと雖嶋津公大慈寺の西院和尚をして仰を蒙らしむるに由り天龍寺の桃菴を上せ明國齎を所の漆器及土物を進め一禮を為んと秀吉大に喜ひ席を設け使臣を饗し物を賜ふ五事畧ニ曰關白其使ニ求ムルニ北山ノ地ニ兵ヲ屯セシムルヲ以テス彼僧敢テ其命ニタカフルナシヤカテ銀四百塊毎塊重キ一四兩ニタカフルナシ三錢ナル物ヲ與ヘテ賞ス天龍寺日本ノ使ト同ニ此レ本國ニ歸リテ其由ヲ申スニ尚寧ユルサスクト僧遂ニ自ラ縊レテ死ス日本ノ使歸リテ斯クト申ケレハ關白大ニ怒リテ北山ノ地ヲ以テ我ニ與フルナカラン二ハイカテカ我銀ヲハ受ケヘキトヤ毎年ノ尚寧ヤムヲ得ストシテ銀四千兩ヲハタセヌ尚寧ヤムヲ得ストシテ其銀ヲ倍シテ還ス

後又使臣を大坂に留め義弘に命して優遇せしむ島津氏琉使ヲ率テ幕府ニ覲見スルノ始トス十八年五事略文祿元年ニ紀スルハ誤カナラン二月秀吉復書を桃菴に授けて曰玉章披閲再三薫讀殿閣を同ふして芳言を聽くか如し今本朝六十餘州に尺寸の土地といへども悉く

我ゝ掌握ゝ歸せり頃ろ更ゝ雄飛の志あり政化を異域ゝ及さんこと亦我素願ふり會さゝ貴國の使節先つ来る凡そ物遠きより得るを珍と言ひ罕ゝ觀るを奇とせ〳〵今遠方の珍奇を得る何の悦ひゝ之ゝ如かんや其地千里を隔つといへゝ又今より以後深く交誼を執らハ異鄕も亦四海一家の情あり因て本邦の産物を贈り聊ゝ以て謝を言ふ餘蘊ハ天龍寺東堂ゝ吻付せりと五事畧曰関白ヨリ答ヘラレシ書ハ十九年明萬曆十九年鹿苑寺ノ僧西笑和尚草シタリト

秀吉征韓の兵を起に此時ゝ當り龜井茲矩秀吉ゝ請ひ琉球を討〜て已ゝ有と為さんとに島津義久父子之を聞き細川幽齋石田三成ゝ依頼〜琉球の古來薩摩ゝ附庸たるの由來を陳へ〜む茲矩乃ち止む喜安日記曰龜井武藏守承テ既ニ琉球入相催ノ時薩州ノ君修理大夫義久公御朱印ヲ申カヘシ相留メ給故ニ國家安穩ナリキ是薩州ノ恩ニ非ラスヤ云云

又原田孫七郎と云ものあり琉球ゝ到り交易を為にこと數年頗る其地理を諳んに因て秀吉の侍臣ゝ憑り説て曰吾琉球ふ赴き告るゝ征明の事を以てせハ彼れ必に來聘せんと秀吉其説ゝ從ひて書を作り原田ゝ授く其略ゝ曰本邦百有

餘年群臣割據して互に國を爭ふ予れの生るゝや天下を治むへきの奇瑞あり十年を出てゝして海内一統に歸に是に由て三韓琉球遠邦異域塞を款き來り享に今や大明國を征せんと欲を蓋し天以て我に授くる所なり琉球宜しく明春出師の期を候ち肥前の轅門に來り謁にへし若し懈りて期を愆らハ必に水軍を發し島民を鏖せんと又秀吉義久に令して曰琉球ハ薩摩の所屬なり速に其兵を徵し征明の役に從ハしめよ遲滯せハ討伐せんと義久老臣に問ふ老臣等議して曰琉球海南に僻在し安を偷ミ武に慣れに其兵を徵せんより寧ろ糧食を課するに如ふにと義久其議を以て稟に秀吉之を聽るに義久使を琉球に遣し其旨を傳ふ限るに明年二月を以てを尚寧大に驚き其臣鄙迥（三司官若に那親方）に命し急を明國に報せしむ此時明の商客陳甲と云ふの琉球に在り之を聞き還りて福建の巡撫趙參魯に告く又江左の醫生許議俊朱均旺の二人薩摩に寓に變を聞て福建の守臣に報通に秀吉怒て殺さんとに德川家康曰變を聞て本國に通牒

に是人情の常ふり措て問ハさるも亦通德から
んと秀吉乃ち止む是歲尚寧建善寺の僧大龜及
ひ茂留里大屋子を薩摩ゟ遣し方物を貢に秀吉
屢く使を薩摩ゟ遣し琉球の來聘を促かし及兵
賦を輸に の遲きを責む十二月義久其臣新納久
饒ゟ命し秀吉の檄を齎らし往て尚寧を諭さし
む文祿元年正月秀吉又義久をして琉球の兵賦
を促きしむ是歲法司馬世榮致仕に馬良弼其職
を継く二年尚寧天王寺の僧菊隱及ひ摩文仁親
方ふ命し糧食を齎らし薩摩に送致に冬尚寧法

司鄭禮名讓親方等を明國ゟ遣し方物を貢し冊封を
請ふ是歲明主使を本朝ゟ遣し和を議に是ゟ於
て秀吉征韓の師を班し仍ほ九州の兵をして朝
鮮を伐たしむ故ふ薩摩琉球糧食を輸に初の如
し十二月義久成就院の住持僧を琉球ゟ遣し書
翰及ひ物品を尚寧に贈り糧食を輸に の忠を賞
し且續て之を輸送もへきを戒しむ三年尚寧田
翰を使僧ふ付に其略曰く弊邑の賦を徵せらる
ゝや偏く國内ゟ募ると雖とも窮島の疲民償出
に計ことふし使僧の審ゟ知る所なり只願くハ

憫察して恩優を加へられ隣好益〻修め永く聘貢を奉せん佳貺忻ひ納め不腆の貢物聊別楮は具に炤諒せらきは甚幸ふりと義久之を秀吉は報を秀吉義久は命して琉球の全島を査撿せしむ是は於て義久興國寺の住持僧及ひ伊地知重房を琉球は遣して其地を檢覈せしむ四年重房等還る時は義久京師は在り重房等京師は至る石田三成は依りて秀吉は稟報に是歳（世譜ニ據ル、時ハ當ニ前年ニ紀スヘシ）尚寧其臣于灝等を明は遣して冊封を請ふ福建撫臣等明主は啓して曰く海氛未〻息まに勅を齎らして福建は至り先つ來使ふ面領をへして或ハ武臣の海は慣る〻者をして往て旨を傳へしむるも可ならん明主曰く世子の請表を待ち然る後之を議せんと慶長三年八月秀吉薨に十二月義弘及世子忠恒等兵を収めて朝鮮より還る四年尚寧法司鄭禮等を明國は遣して方物を貢し冊封を請ふ禮部議して曰海氛今尚甚盛かり人を遣して難し願くハ該國の王舅法司等の官印と世子の奏本とを取り冊封を行ハん明主曰彼れ屢く冊使を請ふ宜しく廉勇の武官一員を撰ミ

往て其禮を行ふへしと五年尚寧又其臣蔡奎等を明國に遣し冊封を請ふ明主尚未だ許さに六年明主兵科給事中洪朕祖を正使とし行人王士禎を副使とし琉球に赴かしむ尚寧法司鄭迫等を明國に遣し文臣を差遣せらるんこと狀請ふ會さま洪朕祖母の憂に丁り職を解く右給事中夏子陽を以て之に代ふ巡按方元彦撫臣徐學聚曰く海濱多事なり宜しく武臣を遣はすへしと夏子陽等曰屬國の請爽ふへからにと堅く行かんこと狀乞ふ議未だ決せに七年に至り尚寧王舅毛繼祖等を明國に遣し方物を貢し彼の太子の立を賀し兼て冊使の速かに來らんことを請ふ是歲琉球の商船奥州に漂流せ德川家康沿道驛くに令して夫馬を給し薩摩に護送せしむ明年薩藩人をして琉球に送致に又琉人漂流して肥前平戸に致る乘る所の船已に破壞に藩主松浦法印佗船を以て薩摩に致せり政權の德川氏に歸るや義久琉球の僧報恩寺某を召して親く宇内の現況を諭し還りて尚寧に告げ速に德川氏に覲んことを教へしむ初め秀吉の兵糧を琉

球に課をろや督責甚く嚴なり義久新納久饒を遣し反覆説諭せしむといへとも命を奉せれ尚寧等疑ふて薩摩の暴令に出るもれと為し稍く背戻の端を開きたり喜安日記ヲ按スルニ慶長十四年三月琉球ヲ征シタル時ノ言ニ曰今年如何ナル事ニテ誼絶ヲハ起サレケルワト云ニ先年報恩寺使僧ノ時不思儀ノ事ヲノミレ給ヒケルニ依テナリ其比ノ三司官ハ名護浦添若那ニテ候ヒケリ方物ニ八木ヲ進上セラレタリ名護浦添宜フニハ八木体ノ物方物ニスル事終ニ其例ヲ聞カス如何有ルヘキヤラントアリケレド若那申サレケルハ當時納殿ニ相當ノ物ナシ不苦ト宜フカナラスシモ日本ヲ蔑如シ奉ルニモナカリケリ風流ヲ不知カナス處ナリ若那童形ノ時大明南京ヘ學文ニ渡リ年尚レクシテ歸國セレ故乎大和ノ風ヲレラサル故ニ天下ノ大事ニ及ヒヌルコソウタテケレ云云ト九年二月義久又使を遣し手翰を尚寧に贈り其罪を數め且諭して曰く速に聘使を發し駿河に朝せよ若し險を特み順はされは忽ち我兵艦を來さんと又琉球那覇の人牛助春と云ものあり前年漂流して平戸ふ到り松浦氏送て薩摩に致せり嘗テ鹿兒島ニ來リ大坂ニ至ル秀吉召見シテ其冠ヲ取リ自ラ之ヲ冠セシ事アリト蓋シ其頭大異ナルヲ以テナリ忠恒之を召して謂て曰吾琉球を討さんとに爾等郷導とふれと助春曰く人を導て我本國を討さしむるハ不忠なり助春死にとも為さにと之を強ゆれとゑ從ふハに却て

書を作り薩兵將ゟ出んとゝるを本國ゟ報を忠恒其忠を嘉ミ〻縱〻て國ゟ還へに是より先き関ヶ原の役浮田秀家薩摩ゟ奔る家臣來り集るもの甚多〻秀家忠恒ゟ請ふて曰く聞く琉球久〻く入貢せにと願くハ余ゟ此國を賜へ余伐て之を取り永く臣屬と為さんと忠恒笑て對へに秀家其家臣と謀り竊ニゟ舩を發に風ゟ遭ひて舩壞も達をること能ハに秀家已れの薄命を歎〻て止む九月尚寧仲村親雲上を使と〻て薩摩ゟ聘問に十年明主右給事中夏子陽を正使と〻し

行人王士禎を副使と〻し六月一日那覇ゟ抵り冊封の禮を行ひ尚寧を封〻て琉球國中山王と為〻仍て皮辨服等を賜ふ尚寧爵封ヲ請フモノ凡四回ニシテ始メテ冊使来リ封セラルヽコトヲ得タリ是より尚寧明國を頼ミ愈〻本邦を疏んに七月島津忠恒義久義弘と議し其臣本田親貞を駿河ゟ遣〻本多正純山口直友ゟ頼り琉球を伐んことを請ふ八月正信等之を家康ゟ聞き家康直友を〻て旨を傳へ〻めて曰再ひ使を發〻來聘を促〻猶遵ハさまゝハ更ゟ征討を議せんと是歳始て天界寺を以て廟所と定む尚

寧法司翁寄松を貶して庶人に下せり蓋し鄭迥の讒に係るなり十一年六月十七日島津忠恒伏見城に詣り德川家康に謁し（此時家康忠恒ニ腋ヲ賜ヒ偏名ヲ與フ是ヨリ忠恒家久ト稱ス）請ふて曰く琉球は我が祖先以來連綿入貢せし國なり然るに近年來聘を絶つこと久し屢く使を派して之を諭せども應ずる色なし速に征伐して國威を張らんと家康始めて之を許せり是歳尚寧鄭迥を以て法司とし又王舅毛鳳儀正議大夫阮國を明國に遣し冊封の恩を謝し尚寧崇元寺の住持僧及び宜謨里主を薩摩に遣し家久の襲封を賀し家久其臣嶋原宗安を琉球に遣し三司官に勸諭し其聘使を駿河に發し德川氏の政權を掌握せしことを賀せしむ是より先き明國の商船我邦に來らざること殆んと三十年是に至り德川氏琉球を介して明國に告げ舊に仍り商船を通じ交易を爲さんことを請ふ琉球三司官若那親方（謝名又ハ邪那ニ作ル）固く拒みて從はず義弘又書を作り（五事畧曰其書ハ僧南浦草ス南浦ハ四書集註ニ點ヲ加ヘシ薩摩僧文之ト云ヒシ僧則チコレナリト）尚寧に諭し且曰く猶從はざれば師を起して其罪を問はんと

其書は曰貴國の我薩州を去るもの二百餘里其西嶋東嶼の相近きもの僅は三十餘里は過きに故を以て時く聘問聘禮有り以て其鄰好を修むるもの其例舊し就中我宗子の嗣て立てを則青雀黄龍を其舟は画き以て其衣を紫はするもの其巾を黄はするもの二人をして其遣使と為さし免厥の玄黄を篚はし來りて髻を右鬢の上は結ふもの衆樂を庭除は奏に蓋し嗣子の賀儀を致にあり今や崇元寺の長老宜謨里主を遣し其方物を載せ來り以て我家久の嗣て立つを賀を

又舊例を舉るなり我も今言を國君は寄に我の言を以て之を靡ふこと勿れ日本六十餘州源氏一將軍あり不猛の威を以て其號令を發し尺土も其方物を獻せさる者あ一民も其幕下は歸せさる者あ是故は東西の諸侯朝覲の禮有らさるなく我も今麗府の任を去ると雖毎歳親族の左右は在る者をして行て以て其聘禮を致さしむ況んや家久國の宗主為り豈は年々の職を述へさらん哉是より先き我此事を以て三司官は告るもの數くあり未さ其聘禮あるを聞かに

是亦三司官内は懈る者は非ずや今歳聘せに明年も亦懈らハ危うからさらんと欲をとゝ得可きんや且復さ貴國の地支那は鄰る支那日本と商船を通せさるりの今は三十餘年我う將軍之を憂ふるの餘家久を貴國と相約して年く商船を貴國は來らしめ而して大明日本と商賈貨財の有無を通せしめんと欲に若し然らハ則翅は我邦を富ものみとは匪に貴國も亦人く其富ミ屋を潤し而して民も亦市は歌ひ野は抃ん豈は復さ太平の象は非ずや我將軍の志茲ふ在り是故ふ家久小官二人をして之を三司官は告けしむ三司官可うに將軍若し之を問ふと有らハ則家久之を如何うを可きや是れ我う夙夜茲を念ふて措うさる所以かり古を善く國を計り家を謀るもの大と雖とゝ小は事ふ時の宜は隨て之を為にすり況や小の大は事ふ豈は之を其理は背くものと為をへきんや其存をると其亡ふと共り國君の一舉は在るとと伏て乞ふ之を圖ま)と初め征韓の役兵一萬五千人を薩摩琉球は課に薩摩の議は依り改めて琉球は課にるふ

七千五百人は十箇月間の口糧とを以てに兵罷むは及ひ僅は其半を輸に薩摩藩主は命して督促猶頻りあり若那池城の親方等七島の夥長は賴り銀子を藩は假りて其不足を補ひ年〻夥長は付して米を輸して消却せんことを請ふ因て之を許も其後年を經て米を輸さに是は至り夥長を遣り督責に若那曰既は輸送せり復さ償ふへきものなりと夥長曰吾等の船未さ一たひも米を載せて至りしことなしと若那大は怒り夥長を拘留し數日の後纔は放ち還に夥長其由を薩

摩は報聞に是の時家久伏見は在り其臣島津忠長等は命し戰艦を造り明年の秋ふ及ひ將さは大島を討せんとに（時費ヲ幕府駿府城ヲ築キ土役ヲ列侯ニ課ス十一月命ヲ下シ特ニ薩摩ノ課役ヲ免ス蓋シ琉球ニ事アルヲ以テナリ）十二年明主閩人阮國毛國鼎の二人を琉球の臣籍は入るを許に蓋し洪武永樂間賜ふ所の三十六姓漸く滅絶は屬に因て其欽を補ふあり十三年九月家久幕府の允可を受け兵を募りて琉球を征せんとに先つ大慈寺の僧龍雲廣濟寺の僧雪岑及ひ島原宗安等を遣し旨を諭して速ちに駿河は入貢せし

む若那復固く拒ゐて聽このに剩さへ使僧等を罵
辱に使僧等怒りて那覇を發し船を中の島ゑ繫
き飛船を以て其狀を具報に龍雲琉球の地圖を
作り以て遞送に十四年二月義久義弘家久琉球
征討の議を決し軍律十三章を定め樺山久高（椎左衛門）を以て大將とし平田増宗（太郎左衛門）を以て副將
とし凡總勢三千餘人の兵を具し戰艦百餘艘ゑ
打乘り七島の舟子小松吉兵衛等を以て先導と
し二十一日前軍麑島を發に（喜安日記ヲ按スルニ宗從ノ侍三百餘人都合其勢三千餘人七十餘艘ノ舟ニ取乘リ慶長十三年三月三日麑府ヲ立チ山川ニ着キ舟汰）

義弘家久兩
（レテ明ル四日出船ストアリ中山世譜曰三十七年己酉春日本以大兵入國執王至薩州トアリ三十七年ハ萬曆三十七年ニシ即慶長十四年ニ當レリ今ハ世譜ニ從フ）
將を送りて山川港ゑ至る義弘家かゑ久高ゑ諭
して曰く那覇港ハ防禦必に嚴ふらん宜しく其
不意ゑ出て佗港より進入にへし久高旨を拜に
三月四日山川を發し七日大島ゑ至る久高ハ津
代港より増宗ハ西間切より入り銃を放て攻擊
に酋長笠利ゑ屯し兵を分ちて防戰に島民驚き
て曰棍端ゑ火を發てり當るへうすして遁れ
て山林ゑ匿る那覇大屋子（那覇人ヲシテ大島諸郡ヲ治メシムルモノ）

畏縮して降を乞ふ乃之を許に次は德の嶋を討つ島民拒戰も薩兵銃を放ち狙擊して三百餘人を殪に殘兵恐怖して悉く降る二十一日進みて沖の永良部島は抵る島民迎へて降る二十三日琉球の船洋中を過く伊集院久元をして之を追ハしむれども及ハ（喜安日記三月十日兵船大島へ著津シテ島ノ軍弱クシテ敗軍スト飛脚到來ス因茲俄ニ除目在テ大龍寺以使長老紫衣賜テ大島へ使僧ニ參ラルトアリ蓋シ久元カ追フ所ノ船ナランカ）二十四日久高等舟師を發して那覇港は向ふ先つ七嶋の小舟六七艘を遣して其動靜を偵ハしむ港口ハを鐵鎖を張り警備果して

嚴ふること義弘の先見は違ハに薩兵の來るを見て齊しく銃を發を久高其遽かは破り難きを知り二十五日（喜安日記二日同十六日今歸仁ニ兵船著ト聞ヘシカハ國中ノ騷動不斜云く前後異本ト日ヲ異ニスルモノ少ナカラス今ハ沖繩志ニ從フ）船を返して運天港は向ふ是は於て尚寧按司三司官等を召し集議して曰く西來院菊隱ハ嘗て薩州は在り三殿義久義弘家久も亦善く知らるゝものなり之を遣して和を請ふは若のにと即ち命を下し名護按司良豐江洲榮真等を副へ喜安坊主津見池親雲上等を隨へ三十餘人のも共廿六日を以首里を

發し今歸仁にそ着きにきる折節大將久高ハ今歸仁城に在りしら暮に及んて本艦に還りきれハ西來院等ハ尚寧の旨を傳へ只管罪を謝に然れとも心事測り難きれき久高ハ大慈寺の僧龍雲市來織部村尾笑栁等をして之に應對せしめ且傳へしめて曰西來院長老江洲榮真ハ那覇に還るへし又名護按司ハ留りて織部の舟に乘るへしと是の日副將增宗等ハ今歸仁城を攻む城兵旗幟を望ミて遁走に水軍ハ廿九日拂曉運天港を發し陸軍ハ四月一日を以上岸に本嶋の山

岳頗る崎嶇島人ハ險を恃ミて備を設けを然きとも或ハ伏兵のいらんとを畏れ到る所火を放ち山を赭かして進む時に若那ハ久米村の城に據りて拒戰に薩軍攻て之を拔く若那遁れて首里に走る小松助四郎追擊して之を捕縛に斯くて水軍ハ那覇灣に上陸し浦添城を火攻し龍福寺を燒立て水陸の軍勢南北より討入り進んて大平橋外に迫り首里城を圍む尚寧ハ越來親方を將とし宗徒の軍兵百餘人を發して防き戰ひ或ハ伏を設けて薩軍の過るを要擊に薩軍

大は怒りて奮戰數刻銃丸雨の如し此時城間鎖子親雲上丸は中りて倒るゝと均しく薩兵の其首を擧るを見るや城兵怖きて敗走し復さ一人の支ふるもの無し此日薩軍の死傷亦少おうらす時は大慈寺龍雲市來織部村尾笑栖等那覇は在り具志上王子尚宏ハ西來院菊隱名護按司池城安頼豐見城盛績江洲榮真喜安津見等を率る親見世（役所名）は來り三司官等連署の謝狀を捧け降を乞ふ久高衆議の上之を許に是夜具志上王子ハ尚寧の寢室は入り諭して曰今日の現狀如何

ともすへうらに人或ハ曰優柔不斷はして汚名を後世は殘さんより潔く城を枕はせんはハ若うにと是武夫小人の言のこ大人君子の取る所ふあうに顧れハ内殿夫人在ませり侍婢亦少ううに慘狀を眼前は見ること固より美事はあらに況や社稷を失ふをや臣ゥ見る所はしれを速は城を下り尚家を全ふし永く宗廟の祀を保さんとそもうにと言畢て涙さ雨の如し尚寧曰吾ハ汝は從ハんと袖浸して夫人を携へ板輿は駕して城を出て名護按司の宅はそ舍りきる

後まゝ移りて浦添殿ゝ居る是ゝ於て久高等首里城ゝ入り人をして簿書貨財を點檢せしめ嚴ゝ劫掠を禁じ城下の兵を撤して那覇ゝ駐め國民をして各業ゝ安せしむ兵を起せしより四十餘日ゝして琉球盡く平く久高等相議して本田親政蒲池某を那覇ゝ留め國内を鎮戍せしむ十六日尚寧及ひ具志上并ゝ三司官等を崇元寺ゝ徵し久高增宗之ゝ對面して後更ゝ織部笑栖等を遣し命を傳へしめて曰國王以下ハ謝恩の為め薩摩ゝ到るへしと既ゝして尚寧旅裝始て整

ふを告く五月十四日久高等尚寧及ひ俘獲の輩の共を將る那覇を發して薩摩ゝ至る尚寧ゝ從ふものハ具志上王子中城王子佐鋪王子及西來院菊隱報恩寺恩齋大里親方池城親方江洲親方以下百餘人なり浦添親方若那親方の二俘ハ別船ゝ戒しめ兵士をして送らしむ當日警護の兵士尚寧を浦添殿ゝ迎ふるや居殘る夫人等別れを惜しゝ歎き悲しむゝ大方おらに泣く聲ハ晃か嶽の巔ゝ轟き墮る涕ハ龍潭の塘ゝ溢るゝとうりなり浦添殿を發し那覇ゝ到り通堂ゝ休憩

に尚寧は西來院菊隠江洲親方等を顧て謂て曰吾聞く積善の家には餘慶あり積不善の家には餘殃ありと今餘慶既に盡き餘殃孤に身に及ぶ父母の國を去り遠く扶桑に赴かんとに一樹の陰に舍り一河の流を汲むも亦他生の縁といへ已に彼一こゝに至らは孤身復た誰に托せんと從臣等皆之を聞き涙に伏して對へて曰臣等世〻爵禄を辱み父母を養ひ妻子を育に皆是も君恩に非らもや禽獸もゝ尚ほ恩を知る況んや人に於てをや願くは王駕に從ひ臣子の分を盡し世〻の洪恩に報ひ奉んと尚寧始て心安くして船に乘る友野二郎右衛門三嶋九郎左衛門等本船を守護し今歸仁大島を經て廿四日薩摩山川港に着きもゝ廿五日上陸し山川の假屋に留まる久高は人を殘して警護せしめ即日鹿児島に凱旋に廿六日家久使者を發し捷を駿河及江戸に報に六月三日藩命あり町田久幸（勝兵衛）鎌田政徳（左京亮）等山川に至り尚寧等を守護に義久正興寺の僧文之を遣し尚寧を慰勞に廿三日尚寧等を舟に上せ鹿児島に至る時に新殿既

に就りたれハ尚寧をして之に居しむ是日浦添若那後れて上陸に若那為人魁偉觀るゝの堵の如し六月廿六日尚寧等鹿兒島城に入り義久及義弘父子に面し叩頭罪を謝に且銀馬代及方物を獻に家久等溫言を以て慰籍し屢〻饗宴を開き其情懷を勞問に八月三日國府に伴ひ六日喜入大炊助の宅に邀宴に僧文之詩を賦し西來報恩二長老に寄に（序アリ　畧ス）其詩に曰大旆迎來鋪錦茵、河清一會更無倫、何圖君子衣冠地、容此方袍圓頂身、藩主の優遇至らさゝる所なし尚寧情意漸く安く上下感喜せり十二日鹿兒島に還る是より先き七月五日將軍秀忠手書を家久及義久義弘に贈る前將軍家康も亦手書を家久に付し琉球を管領せしむ且本多正信（佐渡守）本多正純（上野介）山口直友（駿河守）等前きの捷報の返書を寄に（本書卷島津氏ニ現存ス其文載セテ沖繩志ニ詳カナリ）是歲家久其臣上井里兼阿多某を琉球に遣し土地を檢し經界を正さしむ十五年三月里兼等還り檢地帳を呈に是歲家久尚寧を將る駿河及江戸に抵り將軍父子に謁に四月十一日麑島を發に尚寧に從ふ者ハ具志上

王子尚宏中城王子尚熙佐鋪王子尚豐僧菊隱僧恩齋江洲親方江曽親方等以下無慮二百人ばかり是日市來の港に至り十五日船に乘り午時纜を解き西海より山陽海を經て六月廿七日大坂に抵り黄蓮社に舍る逗留數日の後舟行樂を奏し淀川を溯り伏見に上り心光寺に館を廿八日家久先つ伏見を發して關東に向ふ琉人池親雲上具志親雲上思五郎思次郎等家久愛する所とおり率ゐて東行に廿九日午時尚寧等尋て發に弟子九越後守等護して之に從ふ又村田彦右衛門

といふものあり山口駿河守の臣なり俱に從行に幾内都鄙の老少路傍に充滿し行裝を觀るも其數を知らに人ハ顧りをるを得に車ハ輪を轉をる能をさるに至りしとそ家久先つ駿河に到り前將軍に謁し物を呈して琉球を賜ふの恩を謝に八月十日尚寧駿府に抵り尼崎に館に十六日家久尚寧を將ゐ前將軍家康に謁に尚寧食籠蕉布唐盤硯屏燒酒等の物を獻に十八日前將軍散樂を張り家久及尚寧を饗に常陸介頼宣鶴千代頼房の二公子自ら起て舞上接遇甚ゐ優ぶり二

十日家久尚寧を伴ひ駿府を發し二十五日江戸に達し（具志上王子會く病に罹り起つこと能はざ一日遂に沒す廿四日清見寺に葬る王子は國相タリ因て明年西來院菊隱を以て相臣加判役に任ず）将軍秀忠尚寧を芝の真福寺に舍らしむ（喜安日記行宮誓願寺に相定トアリ）二十六日将軍使を薩邸に遣し家久を勞ひ精米一千苞を贈る二十八日家久尚寧を將て大城に秀忠に謁し（喜安日記九月十二日午時計り御城千疊敷に於て御對面アリ外侍に家子郎等共肩を双へ滕を組て列居タリ内侍に一門ノ大名上座して諸國ノ大名小名屬ナカレタリ主上（尚寧）陸奥守家久公御同心にて御座に入セ給フ御問答ハ人不知中城王子佐鋪王子御両人ハ御座敷へ入セ給フ御進物ハ緞子云〻）各物を呈し恩を謝し

秀忠二人に賜賚に九月三日秀忠ハ家久尚寧を召し宴を賜ひ尚寧を慰諭して曰く琉球王一系相繼きて今に至る佗姓を立つへからに速に國に歸り祖先の祭祀を奉せよ尚寧大に喜ふ七日家久を招き手親ら茶を點し以て饗に十二日家久尚寧を將て參城に十六日秀忠又饗宴を設け家久尚寧歸國の暇を給し家久に太刀一口馬一匹及別邸を櫻田に賜ふ二十日（喜安日記九月十五日トアリ）家久尚寧を率ゐ江戸を辭し路を木曽に取り京師に過り（喜安日記ニハ家久遣ヲ使シ尚寧ニ京都一見ノ事ヲ促セ従ハサリシヿヲ

記シタリ大坂より海路を経て十二月廿四日鹿兒嶋
より還りきゝ是歳家久其臣鹿島國重毛利元親
等を宮古八重山二島に遣し土地を檢せしめ里
葛原某宇田某をして大嶋を鎮撫せしむ十六年
四月家久其臣相良頼重有馬重純を徳の島に遣
し其地を鎮撫せしめ且租税の法を定む八月九
日家久町田久幸鎌田政徳を遣し歸國にへき旨
を傳ふ尚寧驚き喜ふ喜安日記ヲ案スルニ尚寧ハ永ク薩摩ニ拘留シテ縱サストノ聞ヘアリ琉人憂苦寢食ヲ以下ノ俘虜安セサルノ際突然斯ノ吉報ヲ得テ大ニ喜ヒタセル事ヲ載セタリ九月十日更に一紙の目録を作り伊勢

貞昌をして知行充行ふ可の證狀を付に曰惡鬼
納伊江島久米島伊勢那島計羅摩與部屋宮古島
登那幾八重山島総合八万九千八十六斛右諸島
の封疆國主の有と為し之を分配に但毎年薩摩
に貢納をつき物ハ芭蕉布三千端上布六千端下
布一万端唐苧千三百斤綿子三貫目椶梠縄黒縄
各百房筵三千八百枚牛皮三百枚と定め九月十
日三原諸右衛門等をして三司官等と相約せし
む沖縄志曰草高壹石ニ租米九升二合ヲ課スト本文各種ノ貢物米ヲ以テ代納セシメタルモノカ後改メテ貢納八千六百石餘トシ内三千六百八十石ハ黒砂糖九十七万斤ヲ以テ代納セシ

ヲ減シ明治五年大政府ノ直管トナリ四百餘石八千二百石トシ石代ヲ以大藏省ニ納ム

尚寧の歸鄕を許せ𝑩は當り家久相良日向守を大乘院𝑩遣し尚寧𝑩は諭して異心おき旨を表せしむ其誓文曰琉球往古より薩摩嶋津氏の附庸たり故𝑩大守龍封の時紋船を艤して之を慶弔し方物を獻に其儀禮必惰るを得に就中豐太閤の時定めて徭役を輸さしむ而して國遠く民疲き悉く命を奉にるこ能はに坐こら其期を愆ち遂𝑩は問罪の師を邀へ自ら宗器を破滅に罪戾謝せる所を知らに臣主流離僅こら身を貴邦𝑩寄せ復こ生還を期せに死も孤鳥の籠中𝑩在るこ如し圖らさりき家久公哀憐を垂きさせられ啻𝑩は臣等をして父母の國𝑩歸ることを得せしむるのみおらに剩さへ諸島を割き吾𝑩は錫𝑩誠𝑩意外の幸おり其厚恩何を以てこの報ひ奉らん永世薩摩𝑩隷し敢て違ふことをこへし今神𝑩誓ひ札𝑩筆し之を上呈し副本を以て子孫𝑩傳へ永く疎意無こらしめん且隨時定めらるし所の法度違亂をへこうこ𝑩ハ今更論を俟こに若し背く所あらんこの神罰立ろ𝑩至り復こ起つこと

を得さるへしと其重臣も亦誓文を呈に其意上文の意を承け且曰若し球國の臣民厚恩を忘却し逆意を逞しゝ事を為すものあらんか縱ひ國主之は雷同するとも吾等諸臣は於て は畢生幕下に屬し聊か其叛逆に左袒すること無からんへし今表する所の誓文寫して子孫に傳へ永く忠を貴邦に盡さんと勝連按司以下連署に獨り若那服せに家久又藩老伊勢貞昌（兵部少輔）比志島國貞（紀伊守）町田久幸（勝兵衛）樺山久高（權左衛門）等に命し條約十五條を設け尚寧及其重臣に授けて曰藩命を除くの外

明國に物を誂ること勿れ從來由緒有る品とい へとも職務に堪へさる者に知行を與へる勿れ女房衆に知行を與へること勿れ私に人を奴僕と為を勿れ寺院を多く建ること勿れ薩州の符を持せにして通商を為すこと勿れ琉人を執へて内地の籍に編入すること勿れ貢納定規に違へること勿れ三司官を閣き他人に就て事を為にこと勿れ強糶強糴為すこと勿れ爭論為すこと勿れ農商定稅の外妄に收歛を為すを勿れ誣ゆる者あらは報告せしめに商船を他邦に通ずること勿れ量て京桝の

外用ゐること勿れ博奕僻事為ること勿き此十五條謹て遵守せよ犯者あらハ必ず之を罰せんと實に慶長十六年（萬歴三十九年）九月十九日也（以上諸擔文及爾後代々誓約書ノ類今猶藏シテ官ニ在リ）是日（申刻）奸臣若那（鄭迥）誅せらる若那ハ閩人三十六姓の一にして都通事鄭祿の第二子なり永祿中明の大學に入り業成て還り法司となり大小の政略皆若那に決し威權籍く甚し琉球の國難斯くの如く甚しきに至るも皆若那の偏執移らん才を恃み人を侮るに由ると云ふ時人の識あるもの嘗て謂へらく曰若那

今朝恩に誇り春の霞を花の前に汲み餘薫を一門に及ぼすも為に所皆血氣の勇あり仁義を知るものなからんに他日事有り秋の露を袖の上に浸し殘滴を九族に蒙らしむること無きを得んやと十九日尚寧船を鹿兒島灣に艤し申刻纜を解き諸島を經て十月廿日本國に歸る十二月尚寧使者を駿河及江戸に遣し方物を貢し前日殊遇の恩を謝し尚寧鹿兒島に寓せらるの日家久義弘幕旨を奉し書を明國福建に贈らしむ家久僧文之に命し書を草し尚寧に授く尚寧已を得て

して之を諾に其書は曰琉球國王尚寧書を大明國福建の軍門老大人閣下に上る小邦は日本の薩摩を去る僅に三百餘里三百年來時を以て不聘の方物を獻し其好を修む頃ろ其貢期を愆るの故を以て薩摩兵を小邦に進め小邦荒墟とかる誠に天の命する所今不幸ふして俘囚となり薩摩に在ること已に三年州君家久公外武勇を好み内慈憫を懐き我を待つに貴客を遇にるの禮を以てに三年一日の如し之に加ふに我を小邦に送還に是に於て邦民市に歌ひ野に抃つ豈に幸にあらんや州君言を我に寄に其言に曰夫の邦國の四方に在るや金玉贏りなりといへども或は錦繡給らに粟米盈つるも或は器皿欽く若し有餘にして散せに足らにして聚まること無きれは則ち民用賞らに其貨も亦腐傷せん坐ふうに其腐傷を待んよりは有無を通して各其所を得るに如うに日本金玉器皿無きにあらに但其土宜質素にして中華の文質彬々に及はに是故に小邦をして謀を両大國に參せしめ一は以て日本の商船をして許して之を大明の邊

地ヨ容シめ二ハ以大明をして商船を小邦ヨ來らしめ交〻相貿易せん三ハ以て一遣使をして年〻其貨の有無を通せしめん是れ翹ヨ兩國の人民を富ましの〻小匪らん大明も亦倭寇の為ヨ嚴ヨ兵備を設くるの煩を免うれん三つの者若し之を許に〻無んハ日本西海道九國數萬の軍をして大明ヨ進寇せしめん大明數十州の日本ヨ鄰るもの必近憂ひ〻ん是皆日本大樹將軍の意ヨして州君兩國の志を通せんと欲する所以の者あり伏て冀くハ軍門老大人斯の三の者

ヨ於て一を此ヨ許さハ我ら小邦大ヨ大明の德ヨ沐し且日本の夙志を遂ぎん是亦天朝遠きを恤ミ小を字ふの仁心あり若し然らハ則永く藩職を守り貳心を生ずる無く遐方化ヨ嚮の念世を沒るまて忘れさるあり楮ヨ伏し鄙忱を伸へ仰て尊焰を祈ると十七年三月尚寧圓覺寺の僧因翁を遣し薩摩ヨ聘問に勝連按司大里按司因翁と俱ヨ來りて質とする薩摩琉球館在番此ニ始ル後交代明治初年ニ至ル迄廢セス秋幕府の命ヨ依り十九歲ヨ至る女子五人を江戸ヨ送る是歲尚寧其臣栢壽陳華等を

明國ゟ遣し方物を貢し兵亂の顛末を告け附托の書を福建軍門ゟ贈り且曰く王已ゟ縱されて國ゟ還る因て貢職を修むと浙江の總兵楊崇業奏して曰く日本勁兵三千人を以て琉球ゟ入り中山王を執へ其宗器を遷に宜しく海上ゟ勅し嚴ゟ訓練を加ふへしと又福建の巡無可繼嗣奏して曰く琉球國使栢壽陳華等本國の咨本を執て言に王已ゟ國ゟ歸る特ゟ修貢使を遣ると臣竊ゟ見るゟ琉球列して藩屬ゟ在る固り已ゟ年あり但爾來奄ゟ振ハに日本ゟ拘へられ即ち縱し歸さしむ其國を為ゟ足らさること明らかふり況や人の股掌の上ゟ在り其間ゟ陰陽無きを保さんや且今來る所の船方さゟ海壖ゟ抵り突然陸ゟ登る又聞く已ゟ泉境ゟ入り忽爾帆を揚け海を出つと去來倏忽迹大ゟ疑ふへし今又入貢の年分ゟ非らに據として云ふハ國ゟ歸るを以て報聞にと海外遼絶歸ると歸らさると誰か則ち之を知らん其情をして果して真からさむるも而も貢ゟハ境ゟ入る常禮あり何を以て盤驗ゟ服せに報知を先ゟせにして會城ゟ突入に

る貢は尚方常物あり何を以て日本物を硫磺馬布の外は突増せる貢は齎進常額あり何を以て人伴の多きと百餘名に至る此れ其情態已は平日恭順の意は非を況や又倭之か驅と為に也や但彼れ執る所辭あり應は驟は阻て以て疑貳の心を啓くべうに宜しく正使及人伴數名を留め題請を候て處分し餘衆は廩食を量給して本國は遣し常貢は非らざるの物は一併給付帶回せしむべし始て以て天朝の威を壯し天朝の體を正しふするは足らんと明主議を禮部は下に其議撫臣の言を賛成に乃ち福建の布政使は琉球の事情を移咨に布政使諭して曰く琉球新は殘破を經財匱く人乏し何そ必し之間關遠く來らん還て當は厚く自ら繕聚し十年の後物力稍く完きを候ち然る後復た貢職を修めしむるも未さ晩しと為さるありと是は於て遂は定めて十年一貢の例と為に世譜曰日本吾王縱チ回サル爾カリシヨリ後朝鮮日本運羅瓜哇等ノ國互ニ相通セス本國孤立國用復タ缺ク幸ニ日本屬島度佳喇アリ商民國ニ至リ貿易往來絶ヘス本國亦度佳喇ニ賴ルヲ得テ以テ國用ニ備フ而シテ國復タ安然故ニ國人度佳喇ヲ稱シテ寶島ト曰フト蓋シ其實本邦ヲ指スモノカ

十八年正月尚寧名護按司を薩摩に遣し報して曰百事旧弊を更め一に貴藩の制に倣ひ且使を明國に遣し互市を通じるの事を請へりと義弘復書を名護に與へ尚寧が忠順を嘉し使を發して駿河及江戸に申報に六月家久尚寧が請に應し醫師二名を琉球に遣に元和元年五月大坂兵起る家久関東の命に應し兵を將ゐて鹿児島を發に國頭按司鹿児島の館に在り從軍を請ふ為めに容を變し左馬助と稱し部伍に列に是歳豊見城親方の請ひを以家久伊地知某をして

琉球に遣し書翰簿冊の法を傳習せしむ二年二月天喜也末按司を立て世子と為し國相に兼任に初め家久義弘尚寧の子無く嗣王の未だ定まらざるに小乗し宗器を覬覦するものあらんことを慮り書を贈り早く親族の才あるものを擇び繼嗣を立んことを照顧に因て立つとり五月尚寧通事蔡廛を明國に遣し告て曰日本戰艦五百艘を造り鷄籠山（臺湾ナリ）を脅取せんとに恐くは中國に馳突し閩海の害を為さん故に特に奏報にと（五事略之ヲ疑テ曰元和二年ニ日本ノ戰艦鷄籠淡水ヲ攻取リシトイフ心得ラレズ）

龍ル前ヒ漳古謂フ安ニ各通臺琉コニ定
東ハシノ浦ニカフ浦鎮球レ灣似信ス薩む
大平ハユニ其ナトナルタスル沖摩崎
明番是戸白キ鷄子ユテリ曰リヘノリ縄原
萬ニ鎮居龍鄭延キ寛ヲ命トキ志ハ勢
レ暦留ニリ淡成文平其父王元地受沖ヲ五
テ中遂事水功又ノ年八巻冠を製し色を以て等級を
淡泉後一ニハヲ年ニ縄ク
水長州我初脅肥前取ニメ
洋ノ崎國年ヲ封徙ヒセ
ハ人去住鄭呂宋芝龍
ニ龍ヲニ芝レ松ス浦ト郡ハ安我リレ
ノ天平啓戸朝ニ
地本浦國姓人爺子人芝ニヲ
ニ朝老中去行龍我ノ改カトノ
近ニ一閩クリ國時サイ寧ムリ
レ官来ト塔ニ事ヲ思ヒコ即互ト
按入ト伽云ヲ去明シ今ヲ市西
肥リイ沙フ云リ州ハ小ノヲ説
ス

昌元年尚寧薨ス歲五十七

六年九月秦明寧始尚ニ五冠巻八年巻

南島紀事中卷畢

柳陰書屋藏

南島紀事中卷畢

林陽書屋藏

南巡紀事

中

東京圖書館
昭和
八年
五月
受入
分類
三七号
登録冊

8
5
137

Ⓜ